

タイトル Title	〔研究ノート〕 都の南蛮寺（被昇天の聖母教会）跡出土の石製硯（すずり）裏面の線刻の解釈について
著者 Author(s)	岡 泰正 <i>OKA Yasumasa</i>
刊行物名 Journal Name	関西大学芸術学美術史研究学会 e ジャーナル 第3号 <i>Society for Art & Art History Studies at Kansai University E-Journal, no.3</i>
刊行者 Publisher	関西大学芸術学美術史研究学会 <i>Society for Art & Art History Studies at Kansai University</i>
刊行年月日 Publication Date	2022-12-31
公開年月日 Release Date	2023-1-21
資源タイプ Type	学術雑誌論文 <i>Journal Article</i>
URL	

〔研究ノート〕

都の南蛮寺（被昇天の聖母教会）跡出土の石製硯（すずり）裏面の
線刻の解釈について

【Research Note】

The Christian Chapel in Kyoto and Tobacco-Smoking Culture

岡 泰正

OKA Yasumasa

Around the time that Oda Nobunaga built Azuchi Castle overlooking Lake Biwa and set out to unite all Japan under his banner, the Jesuit missionaries who had been propagating Christianity in the country since Francis Xavier's arrival in 1549, resolved to build a chapel in Kyoto.

Although the building was not fully complete, on August 15, 1576 (twenty-first day of the seventh month, Tenshō 4) a dedication ceremony was held. It was timed with the Assumption of Mary feast celebrated on that day. With a cross at the top of its roof, the church became a landmark in the city and even the people who had opposed its construction flocked to see it.

We can get some idea of the exterior view of this church, which was known as Nanbanji or Nanbandō ("Foreigner's Hall") from a painting by Kanō Sōshū (1731–1781; younger brother of Kanō Eitoku) Miyako no Nanbanji zu (Nanbanji Temple, Christian Church in Kyoto; Kobe City Museum). However, after Toyotomi Hideyoshi had second thoughts about Christianity and issued the order in 1587 expelling the Jesuits, the church was closed and later demolished. It was in use for only 11 years.

In 1973, part of the Nanbanji site was excavated by Doshisha University and many artifacts of the church were unearthed. The findings of the excavation were published in Ubayanagicho iseki (Nanbanji ato) chōsa gaihō (Report of the Survey of the Ubayanagi cho (Nanbanji) Site Excavation). The report touches especially on the picture incised onto the back of the inkstone, which has been interpreted as depicting a mass conducted by one of the Portuguese priests.

In June 2022, when I had the opportunity to view this inkstone first-hand, I immediately doubted the veracity of that interpretation. The figure wearing eyeglasses on the right is said to be a priest conducting a mass and the figure holding a long-handled candle snuffer on the left an assistant friar. But the first time I saw it I was convinced that it shows a foreigner (probably Portuguese) holding a pipe; the length of the pipe's stem is greatly exaggerated.

My reason for thinking so is that there appears to be a bundle of tobacco leaves at the upper right, and below them a basket holding the bundle, and dried tobacco leaves stacked in a pile. At the bottom we can see a knife for cutting the leaves and at left what can be guessed to be two dried tobacco leaves. To begin with, it seems to me quite unlikely that anyone associated with the church would be so impious as to scribble a caricature of the priest performing a mass on the back of an inkstone.

The record of a priest named Pedro de Burguillos that in 1601 (Keichō) the Franciscan friar Jerónimo de Jesús presented Tokugawa Ieyasu with “medicinal tobacco ointment and tobacco seeds” is currently the oldest known documentary record of the introduction of tobacco to Japan. The use of the inkstone excavated from the Nanbanji church means that the introduction can be traced even further back to the Tenshō era. In other words, this inkstone is the oldest pictorial document of smoking in Japan.

本論の目的

来日したイエズス会神父ガスパール・ヴィレラが京都・下京、四条坊門の姥柳町（うばやなぎちょう）に一軒の家屋と地所を購入し、そこを司祭や修道士などの住居とし、小聖堂を設けてミサ聖祭を執りおこなっていたが（一時期、伴天連〈パードレ、神父〉に対して京都追放令が発せられたこともあった）、老朽化したため、イエズス会は教会の新築を立案、建設に着手した。織田信長が安土に城を築き、「天下布武」をめざしていたころ一天正 3 年（1575）のことである。

そして、翌天正 4 年 7 月 21 日（グレゴリオ暦 1576 年 8 月 15 日）、新しい教会は未完成の状態だったが、献堂式がおこなわれた。「被昇天の聖母教会」と名づけられ、マリアに献じられた教会であることから、8 月 15 日のマリアの祝日にあわせたのである。周知のとおり、聖母マリアは地上の生活を終え、死後 3 日後に肉体と靈魂をともない天国に挙げられた。被昇天にあずかった日をたたえて 8 月 15 日が聖母被昇天の日となった。

教会は三階建てで、屋根に十字架をいただき、建物は京都の名所となった。ニエツキ・ソルド・オルガンティーノ神父が、ここで初ミサを捧げた。ミサには近隣諸国のキリシタン 200 名以上が、はるばるかごや馬に乗って訪れ、聖体拝領の儀式もおこなわれた。（註 1）「南蛮寺」、「南蛮堂」と呼ばれたその偉観は、狩野永徳の弟、狩野宗秀（そうしゅう）筆《都の南蛮寺図扇面》（神戸市立博物館）によって知ることができる。（図 1 都の南蛮寺図）この教会は、天正 15 年 6 月 19 日（1587 年）の豊臣秀吉によるいわゆる「伴天連追放令」によって閉鎖、破却されたと考えられ、わずか 11 年の使用であった。

この南蛮寺跡を含む土地の一部が、昭和 48 年（1973）春に同志社大学の森浩一教授の指導によって発掘調査され、大礎石、陶器、硯ほか多くの遺物が検出された。（図 2、3、跡地の碑、大礎石）この成果は、同年刊行の『姥柳町遺跡〈南蛮寺跡〉調査概報』

(以下『調査概報』)に発表された。(註 2) 美濃、瀬戸、唐津窯の陶器のほか、石製の硯が検出され、硯の裏面に線刻による図像(イメージ)のあることが発見された。(図 4、5、6、7、8、9 志野向付 2 点、瀬戸茶碗、唐津茶碗、石製硯おもて、裏)それはミサ聖祭を表現した図と解釈されて今日に至っている。私はこの説に対して疑義を持った。本年(令和 4 年)6 月のことである。私はこの線刻を、日本における喫煙の最も早い画証史料と位置づける。本論では線刻の図像を考察しなおし、新たな解釈を試みる。

都の南蛮寺出土の硯

織田信長が安土城を築き、天下布武をめざしていたころ、フランシスコ・ザビエル来日以来、日本の首都である京都の布教を重視していたイエズス会は、老朽化していた下京の小聖堂を一新することを決議した。「小聖堂には四本の支柱があり、そのうち三本には罅(ひび)が入り、一本は曲がっていた」。(註 3) 同会は畿内のキリシタンたちにはかり、喜捨をつのった。結果、都のキリシタン、近隣のキリシタン領主らが寄進した金銀と米は、2500 クルザードに達した。(註 4) イエズス会の経費も入れて、同会の威信をかけて新しい教会は建てられた。総経費は 3000 クルザードを越えていた。高山右近が高槻領内の神社を破却して建てた教会の 7.5 倍の経費をついやしている。

とくに高山右近の父、高山ダリオ友照は、材木の調達に尽力し、良材は、高槻、近江、紀州から集められた。敷地が狭いこともあって新たな教会は三層となることが決まった。二層まで組み上がった段階で、下京の住民たちが驚く。上から見下ろされると、隣家の娘や婦人たちは庭へも出られないというのである。住民たちは建設反対の陳情のため安土に向かおうとするが、イエズス会側は先に信長のもとに向かい、「彼らは気にせず建築するがよい」という認可を得た。(註 5) 安土にいた信長は建設の許可を与え、3 層の建設を認可したのである。都の奉行(所司代)で信長の家臣であった村井貞勝も、司祭たちが望んでいたとおりの援助を惜しなかった。

こうしてこの教会は、京都の名所となったが、為政者によるキリスト教への圧迫が始まり、ついに秀吉の「伴天連追放令」によって閉鎖され、破却された。この南蛮寺跡から茶の湯に用いられるような上質の瀬戸、美濃、唐津、京都製の陶器や、日常に使われていたと思われる石製硯が出土し、水洗後にその硯裏面に、線刻された図像が見いだされた。この線画の図像を読み取った『調査概報』の記述は、次の通りである。(図 10 概報図版)

「人物線画の構成 線画は石硯の裏面に鋭い沈線で表わされており、欠失している海の方が画の下になる。欠失部分にも線画は続くから、硯が破損する以前に線画は描かれていた。画はキリスト教の儀式をあらわしており、中央右よりの大きく描かれた人物が主人公である。頭には、大きく、華麗なミトラをのせ、後頭部にはその飾紐がたれ下がっている。身には何枚も重ねた祭服をまとい、右手には司教のシンボルともいえるべき牧杖をもち、一見刃物のようなものである壇の上に立っている。顔つきは、大きな鼻と眼鏡に特色がある。中央上よりの人物は、鍔広の帽子をかぶり、ボタンのついた僧衣をまとい、台の上に立ってい

る。右手に長い柄のついた蠟燭消しをもっており、侍者であろう。顔つきは目を普通にあらわし、鼻は大きい、司教の鼻にくらべると小さく、日本人かも知れない。この侍者の立つ台の左に十字架と葡萄酒を入れたらしい容器風のものがあらわされている。また侍者の下には、木の枝と 2 枚の葉があるが、これはこの儀式が限定されたものである可能性（たとえば枝の日曜日など）を示している。

この線画はおそらくミサの図であろうが、この司教が誰であるかとか、このミサがいつおこなわれたかなどについての考察は今後にまきたい。いずれにしても、表現が忠実であるところから、キリスト教の儀式を熟知し、さらに基本的な絵画技法を習得していた者が描いたものと推定されるし、またおそらく日本人のキリスト教関係者の手になると推定されるので、キリスト教文化史上でも重要な資料となるだろう（森浩一）。(註 6)

これを踏まえて、平成 22 年 (2010) 刊行の研究書に以下の文章が記されることとなる。

「京都下京教会・南蛮寺跡

一五六〇年ビレラが設け、一五七八年オルガンチーノらが完成。建築には有力信徒のほか、織田信長の支援も受けた。「サンタマリア御昇天寺」である。発掘調査によって、裏面に線刻画のある石硯が発見された。司教帽ミトラと牧杖を持つ司教と、ろうそく消しを持つ信者が画かれる。五野井隆史によれば、上京した司教で名前のわかる二人のうち、一六〇五年に再建された下京教会（姥柳町）にてセルケイラがミサを執りおこなった光景だという（同志社大学田辺キャンパス歴史資料館蔵、同ホームページに写真）。

服部英雄編（九州大学大学院比較社会文化研究院教授）「キリシタンの史跡と遺物」『史跡で読む日本の歴史〈8〉アジアの中の日本』掲載の指摘である。(註 7)

上記の研究書の記述で明らかなように、出土した硯裏面の線刻は、ミサ聖祭の情景であるとする解釈が、すでに定説化している（ただし、蠟燭消しを持つ「信者」、というのは『調査概報』と異なっている。概報では司祭の「侍者」となっている）。

恥ずかしいことに、私が先の同志社大学の 1973 年の『調査概報』を精読したのは、本年のことであった。都の南蛮寺について布袋山保存会（都の南蛮寺跡地と地縁がある）から講演を依頼され、概報を読み直したのである。ここで硯線刻のミサ説に疑問を持った。2022 年 6 月 9 日、出土した陶器ならびに硯裏面を同志社大学歴史資料館で観察させていただく機会を得て、明確に別の解釈を持つに至った。

キセルとタバコのイメージの認識

当該資料は、小さな石製の硯である。日本の筆記具、硯であることが大切で、教会での和様の暮らしぶりが、見えてくる。裏面に南蛮人の姿があらわされ、「ミサの図」を簡略に彫りつけた硯が南蛮寺内で使用され、これが破損して、廃棄されたものと推定される。廃棄されたから発掘で出土したのであろう。しかし、神聖なミサのようすを彫ったものな

ら破損したからといって廃棄するだろうか、という疑問があり、そもそも日常に使う硯の裏面に、そのような神聖な儀式の図柄を彫り付けるだろうかという疑問が私にはあった。ミサ聖祭を、教会内部の人が軽く見ていることになるからである。日本人の同宿（どうじゅく、宣教師の補助者。伝道士、説教師）あるいは小者（下僕、従者）の私物を示す一種の目印として、南蛮渡来の新奇な風俗、薬効のある嗜好品—タバコの葉とキセルによる喫煙について、感興をおぼえて、戯画的に彫り付けたものという想像を私は初見で持ったのである。それは安土・桃山期、南蛮人につきもののモチーフ、一種のアトリビュション（持物）が、キセルとタバコの描写であったことに由来すると私は想定した。南蛮寺跡からは、竹製の羅宇（中間部分）が失われた銅製煙管も出土している（『調査概報』では、安土・桃山～江戸初期と特定）。（註 8）

一方で、南蛮寺から西洋的な遺物がまったく出土していないことも特記しておかなければならない。渡来したヨーロッパ製の祭具は貴重品だったため廃棄されなかったものと推定される。もちろん、私物とおぼしき小型の石製硯に、ほかでもなく南蛮人の図像が彫られた、ということは、南蛮寺にふさわしい、考察に値する事象であることは確かである。

私の解釈を以下に記す。

線刻された左の南蛮人が立つように硯裏面を縦にして記述していこう。硯裏面の右上には、縄でたばねられたタバコの葉の束が彫られている。この植物をタバコと想定するのは、線刻されたキセルとの類縁によってである。（図 11、12、13 硯細部）上部にはみ出た葉には、細かく葉脈が彫られている。その下に来るのは束を差しこんで立てる容器、提げ手のついた籠（かご）か壺のようなものと見える。容器というのは、まったく私の想像だが、このような略画でくわしくリアルな状態を推定するのはかなり無理がある。この部分は、これまで言われているように人の顔—眼鏡をかけた鼻の大きな司祭の像ではないと私は考える。自説を曲げて、これが人の顔の表現であると判断するとしても、眼鏡をかけているとか、ミトラ（司教冠）をかぶり、牧杖を持つ司祭である、と特定する根拠を私は見いだせない。少なくとも下に彫られた葉を重ねた描写が、司祭の衣装とは思えない。

そもそも、南蛮寺のミサで、ミトラをかぶってミサをおこなったのだろうか。神戸市立博物館の狩野内膳筆《南蛮屏風》では、長崎の教会内で帽子を取り、トンスラ（茨の冠を象徴する頭頂を剃る髪型）を見せる司祭が、サルヴァートル・ムンディの図像の祭壇画（祈念画）に球体を捧げている。（図 14 神戸市立博物館《南蛮屏風》部分）本屏風はフランススコ会士来日以降で、慶長の景観と推定されるが、ミトラなどかぶっていない。そして膝をついてミサをしている。大阪・中津にある南蛮文化館の狩野光信系といわれる《南蛮屏風》においても、坐った武士の信者がロザリオを手し、三本の釘、ならびにその先にある（隠されている）祈念画にむかって十字を切っている描写が見られる。（図 15 南蛮文化館《南蛮屏風》部分）坐して祈る教会の座敷では、司教杖の出番はないのである。

硯裏面の図像の解釈を続ける。一見「顔」に見える、私のいう「容器」の下に、タバコの葉を重ねて干している加工作業の様子、そして刃文のある反りのついた刻み包丁、その左に干し終えた 2 枚のタバコの葉が識別でき、とくに包丁と葉の線刻は、鮮明である。とくに包丁の刃文の線刻はかなり細密である。（図 13）

この線刻について意見を求めた、たばこと塩の博物館の主任学芸員・湯浅淑子氏によると、葉の根本部分がしっかり T の字に表現されているところが、タバコらしいという。江戸中期の例ではあるが、葉を干す場合、その根元を縄に入れるために T 字にするのだそうである。

さらにその上に葉を刻むための「まな板」と、再び包丁の描写のようなものが見えるのだが、このあたりは線が簡略すぎてよくわからない。そして、その上につばのある帽子をかぶり、ボタンのついた衣服を着て、右手に長いキセルを持つ南蛮人と、そのかたわらにキセルを置くラック（キセル掛け）を彫っているように私には見える。これはアフリカ系の従者ではなく、明らかに南蛮人—ポルトガル人の風貌をとらえている。

硯裏面の線刻をミサと解釈するもともと、右のピカソが描いたような人の顔に見える描写にある。これを眼鏡をかけた司祭とするから、ミサを想像し、下部を祭服であると読み取り、牧杖を読み取り、いよいよ深読みの解釈になっていくのである。南蛮寺出土遺物という出自に影響されての解釈かと思える。

くわしく見れば、左の南蛮人の顔に眉が線刻されているのに、右の「顔」には眉がない。だから眼鏡と見るわけだが、恣意的に過ぎるように思う。右のミサをつかさどる「司祭」より左の「侍者」の方が、細かい描写であることは合理的ではない。先に指摘したように「司祭」の身体部分を、何枚も重ねた「祭服」と見ているのも無理がある。まるでシャーマンのような「祭服」になってしまう。左の「侍者」と、右の「司祭」とは描写の密度も様式もつりあっていない。

キリシタンが、神聖なミサを執りおこなう司祭を、まして硯の裏面に戯画のように彫るだろうか、という最初の私の疑問と、ミサの終わりの一時しか使用しない、蠟燭の火消し道具（実際に消して回るのは〈小者—教会の下僕〉の役目だろう）をわざわざ描くだろうか。南蛮人を表象するアトリビュションにもならない蠟燭の火消し道具が絵画化された、ほかの類例を私は知らない。

しかし、これをキセルと見るなら、ほぼ同時代の類例をいくつか挙げることができる。まず神戸市立博物館の《観能図》である。雁首を持つキセルならではの微妙なカーブがついているところが、《観能図》に描かれたキセルのシェイプと一致する。（図 16《観能図》部分）硯の線刻をキセルと見れば、キセルの火皿部分を上に行っているのも合理的であるし、蠟燭の火消しなら、ボウル部分を下にするのが用途に適した向きであるだろう。また、シャンデリアのように灯火を高い場所につるすヨーロッパの教会なら知らず、日本の民家とそれほど天井の高さが変わらないであろう日本家屋の様式を採用した教会で、長い蠟燭の火消し道具を必要とするだろうか、という単純な疑問も湧く（後年の出島オランダ商館のカピタン部屋のような天井の高い場所では必要であったと思う）。

イメージの例に挙げた神戸市立博物館の《観能図》は、慶長 12 年（1607）以降の景観を持つ北野神社が描かれ、時代は天正期からは下るにしても、《観能図》を描いた町絵師が、粉本（ふんぽん）において、喫煙は長く大きなキセルを用いる、という誇張されたステレオタイプを示しているものと考えることができる。新奇で、吉祥の意味を与えられているモチーフは、強調される傾向を持つのである。

また、硯で彫られている 2 枚の葉の描写を、儀式が特定の日曜日におこなわれた可能性を示すなどと宗教的暗喩のように解釈するのも、かなり無理がある。プリミティヴな略画と、この難解な暗喩とは整合しない。たしかにカトリックには、枝の主日（しゅじつ）という日があって、棕櫚（しゅろ）の主日とも言い、復活祭前の枝の日曜日、パーム・サンデイ（Palm Sunday）と呼ばれる。この日から聖週間が始まるわけだが、これはあくまでキリストの凱旋を祝う喜び、あるいは勝利のアレゴリーの棕櫚の枝であって、本イメージのような 2 枚の大きな葉っぱではない。牽強付会というほかない。

しかし、硯裏面の線刻がミサの情景ではないからと言って、硯の価値が下降することはない。むしろ天正期の喫煙の証左として、史料的价值はより高まる。

タバコの伝来を示す最古の文献史料

慶長 6 年（1601）にフランシスコ会司祭ヘロニモ・デ・ヘスス（ジェロニモ・デ・ジェズース）が、伏見城において徳川家康に「タバコ膏葉とその種子」を献上したことが、フランシスコ会修道士ブルギーリョスの記録に見える。この『ブルギーリョスの報告書』が、日本におけるタバコの伝来を示す最古の文献史料である。榊玲子訳「ヌエバ・エスパーニャのたばこ関連史料についての一報告」（註 9）によると、伏見城で皇帝（徳川家康）は伏せっていて、デ・ヘススの献上に対して、床（とこ）から起き上がった。

「皇帝はタバコの膏葉やその種子、カシア（マメ科の植物で果実は緩下剤として用いられる）やその他のこまごましたものが、どういったもので、どのような効能を持っているのか、一つ一つ細かく訊ねられました。そして大変喜んで、近くに控えていた近習にそれらの効能や特性などを全て記録するようにと命じました」。

大仕事をなしとげ、老いて身体を弱らせていた家康が、薬局の主人のように献上されたタバコその他の珍しい「薬草」の効能に強く興味を示す光景が見えるようである。この史料—『ブルギーリョスの報告書』によって、タバコの種子献上の慶長説が出てくるわけだが、それより前に当然、九州では、タバコを栽培し始めていたものと推定される。すでに慶長期に幕府が何度も禁令を出しており、それは嗜好品を栽培して米麦を作らなくなる心配からであるだろうし、かぶきものたちが徒党を組むのに、仲間の結束の手段として喫煙をおこなったことなどを含めた風紀上の問題からであると思われる。タバコがぜいたくな新来の嗜好品だったからであるし、裏を返せば禁令を出すほどにタバコの栽培にはげむ農民がいたわけである。フランシスコ会のデ・ヘススが家康に種子を献上したのも、タバコ膏葉やタバコの種子が珍しいからなのである。献上する側もタバコが種々薬効のある貴重品だという認識を持っていたからにはほかならない。デ・ヘススが献上した膏葉も、たばこのエキスと油などを混ぜたものだったのではないかと推定されている。（註 10）腫れや傷を治すというタバコの薬効が認められていたのである。キセルによる喫煙も、薬効という点で同様の意味を持っていた。

そして何より、桃山から江戸時代初期に製作された柄鏡（えかがみ）には、キセルとタバコの煙を吐く南蛮人（アフリカ系の従者の姿で表現される）が意匠として用いられ、そこに大きなタバコの葉を取りあわせて造形している作例が知られる（図 17、18、19 神戸市立博物館《南蛮人喫煙図柄鏡》、タバコの葉）。これもキセル、タバコの葉、喫煙、そしてそれを新奇な風俗とする当時の異国（南蛮）趣味、吉祥を内包する美意識を反映した、おそらくは当時、最新流行の意匠なのである。大きく表現されたタバコの葉が、硯裏面のイメージと類似する。

当該の硯の図像は、まさにその喫煙流行の初期段階で絵画化された作例ではないか、と私は想定している。昨今、喫煙は肩身が狭いのだが、当時タバコは種々の効能を持つ薬であった。空腹を緩和し、満腹時には消化をたすけ食欲をもたらし。中国ではマラリアを予防するというような働きが知られていた。言ってみれば、硯裏面の南蛮人像は、当時の価値観におけるタバコという「霊妙な薬草」を吸う日本最古の愛煙家のイメージと言えるのである。

結語

都の南蛮寺は、信長時代の献堂式から秀吉時代の破却まで一天正 4 年 7 月 21 日（グレゴリオ暦 1576 年 8 月 15 日）から天正 15 年 6 月 19 日（グレゴリオ暦 1587 年 7 月 24 日）の「伴天連追放令」までの 11 年間しか使用されていない。もとより発掘の精度を信頼してのことだが、あわせて出土した茶の湯に用いられる上質の《志野向付》に代表される出土遺物は、都の南蛮寺の文化的、経済的水準の高さを想察させるとともに、天正期の工芸の基準史料となっている。

検出された硯裏面の線刻は、一見、美術史の史料とは認めがたいように見えるが、日本における喫煙の状況を物語る 1576～1687 年に限定可能な、今知られる最古の画証史料であると言ってよい。南蛮人（異国人）の姿ではあるが、現在のところ、日本風俗史における最古の喫煙の状況—キセル使用とタバコ加工の日本への浸透を示す貴重な史料であると位置づけることができる。ちなみに 1993 年にイギリスで出版された *Jordan Goodman "Tobacco in History"*、邦訳ジョーダン・グッドマン『タバコの世界史』和田光弘、森脇由美子、久田由佳子訳（平凡社 1996 年）では、日本へのタバコの伝播について「日本では一六〇五年頃の記録が残っている」と記されている。（註 11）どの文献を言っているのか特定できないが、1605 年は慶長 10 年であり、硯の天正年間（1576～1587）からは、かなり遅れる。硯裏面のキセルとタバコの葉の描写の重要性があらためて了解されることと思う。

ところで、皮肉ではなく、人の顔に見えるイメージが、出土場所から推断を与え、特定の聖なる対象と読みこまれ、解釈が拡大していくプロセスは、美術史での検討に値する事象と言えるだろう。

註

(註 1) ルイス・フロイス『完訳フロイス日本史②信長とフロイスー織田信長篇Ⅱ』松田毅一・川崎桃太訳 (中央公論社 2000 年) 325 頁 「この祝祭には、都および近隣諸国のキリシタンたちが参集した。ダリオ (引用者註、高山右近の父親、高山友照) は、このような功德を積む機会を失うまいとして、妻子、親族、および二百名以上とともに来訪した。都の市 (まち) の異教徒たちは、いとも多くの群衆が、おびただしい轎 (かご) や馬に乗って我らの教会に至るのを見、一同がまるで復活祭のように、礼服を着用しているのに接して驚嘆した」。

(註 2) 『京都市中京区 姥柳町遺跡 (南蛮寺跡) 調査概報』編著者 (代表) 森浩一 同志社大学文学部文化学科 1973 年発行 (同志社大学文学部考古学調査記録 第 2 号)

(註 3) 註 1) 前掲書 317 頁。

(註 4) 五野井隆史『日本キリスト教史』吉川弘文館 1990 年 109 頁。

(註 5) 註 1) 前掲書 322 頁。信長による安土山の政庁での回答。

(註 6) 註 2) 前掲『調査概報』10 頁。

(註 7) 服部英雄編 (九州大学大学院比較社会文化研究院教授) 「キリシタンの史跡と遺物」『史跡で読む日本の歴史〈8〉アジアの中の日本』(吉川弘文館 2010 年)

(註 8) 註 2) 前掲『調査概報』16 頁。

(註 9) 榊玲子「ヌエバ・エスパーニャのたばこ関連史料についての一報告」『たばこと塩の博物館 研究紀要 第九号 開館三十周年記念論集』2009 年 11 月 3 日発行、研究紀要編集委員会編 248~231 頁。

(註 10) たばこと塩の博物館の主任学芸員、湯浅淑子氏によるご教示。

(註 11) ジョーダン・グッドマン『タバコの世界史』和田光弘、森脇由美子、久田由佳子訳 (平凡社 1996 年) 73 頁。

図版



図 1. 《都の南蛮寺図》扇面 狩野宗秀筆 安土桃山時代 神戸市立博物館



図 2. 京都市姥柳町に立つ「此付近南蛮寺跡」の石碑



図 3. 同志社大学今出川キャンパスの図書館前に移して、保存されている都の南蛮寺跡から出土した礎石



図 4. 都の南蛮寺出土 志野向付
安土桃山時代
同志社大学歴史資料館



図 5. 都の南蛮寺出土 志野向付
安土桃山時代
同志社大学歴史資料館



図 6. 都の南蛮寺出土 瀬戸天目茶碗
安土桃山時代
同志社大学歴史資料館



図 7. 都の南蛮寺出土 唐津茶碗
安土桃山時代
同志社大学歴史資料館



図 8. 都の南蛮寺出土 石製硯（おもて面）
安土桃山時代
同志社大学歴史資料館



図 9 都の南蛮寺出土 石製硯裏面
(片光によって線刻が読み取れるように撮影)
安土桃山時代
同志社大学歴史資料館



図 10. 1973 年刊行『京都市中京区姥柳町遺跡（南蛮寺跡）調査概報』 11 頁



図 11. 都の南蛮寺出土 石製硯裏面（部分）南蛮人の姿
同志社大学歴史資料館



図 12. . 都の南蛮寺出土 石製硯裏面（部分）籠のような容器に収穫されている葉
同志社大学歴史資料館



図 13 都の南蛮寺出土 石製硯裏面（部分）干されたタバコの葉
同志社大学歴史資料館



図 14. 重要文化財 狩野内膳筆 《南蛮
屏風》右隻（部分）
桃山時代
神戸市立博物館



図 15. 重要文化財 伝狩野光信筆 《南蛮
屏風》右隻（部分） 桃山時代
南蛮文化館（大阪・中津）



図 16. 《観能図屏風》（部分）
桃山～江戸時代初期
神戸市立博物館



図 17. 《南蛮人喫煙図柄鏡》
安土桃山時代
神戸市立博物館



図 18. 《南蛮人喫煙図柄鏡》図 17
(部分) 神戸市立博物館



図 19. たばこの葉